

令和 2 年 6 月 11 日現在

機関番号：33917

研究種目：基盤研究(B) (海外学術調査)

研究期間：2016～2019

課題番号：16H05684

研究課題名(和文) ミクロネシアにおけるスカイスケープ考古学の実践

研究課題名(英文) A practice of skyline archaeology in Micronesia

研究代表者

後藤 明 (Goto, Akira)

南山大学・人文学部・教授

研究者番号：40205589

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 10,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究はミクロネシアを中心に、スカイロア、すなわち地上のより上の自然現象が持っている意味、とくに人類の時空間認識について持っている意義を考古学的遺跡の線形構造および民族誌的な情報から探ることであった。2016年はキリバス諸島アロラエ島の航海石、2017年はポーンペイ島のナンマトル、2018年はヤップ島の聖地、2019年はコスラエ島のレラ遺跡を調査した。アロラエ島の航海石については、この石の目指す島と参照されたであろう星座について考察を行うことができた。またポーンペイ緒、ヤップ、コスラエの遺跡の線形構造とパンの実の収穫を中心とした伝統的な暦の関係について分析することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究ではオセアニアにおける豊富なスターロアが地上の建築や集落に如何に物質化しているかを追究した。その結果、空景観と陸景観、昼景観と夜景観を統合した景観論の方法論の開拓、さらにはそれによって明らかになったスカイロアを無形文化遺産(知識および神話・伝承)と有形文化遺産(建築)を統合された知識として記録に向けた方法を構築した。さらにその結果を天文シミュレーションを通して科学的な裏付けすることを試みた。このようなアプローチは在地の知識の今日的な意味づけ、すなわちネオ・サイエンスとしての理解に向け、現地社会の文化の保護や復興発展に資することができるであろう。

研究成果の概要(英文)：This study was focused on Micronesia and explored the significance that skylore, a natural phenomenon above the ground, has for humanity's perception of space and time, in particular, through the linear structure and ethnographic information of archaeological sites: in 2016, we investigated the navigational stones of Arorae Island, Kiribati; in 2017, Nan Madol, Pohnpei; in 2018, the sacred site of Yap Island; and in 2019, the Lelu site, Kosrae Island. The navigational stone of Arorae Island could be considered in terms of the constellations that would have been referred to as the aims of the stone here. We were also able to analyze the relationship between the linear structure of the sites of Pohnpei, Yap, and Kosrae and the traditional calendar centered on the harvest of breadfruit.

研究分野：人類学

キーワード：考古学 民族学 人類学 天文学 オセアニア ミクロネシア 暦 航海術

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

本研究はミクロネシアにおけるスカイスケープ(空景観)人類学の先駆的研究である。スカイスケープ論とは従来のランドスケープ論が暗黙に昼間さらに陸上の景観のみに注意を向けてきたという視点の限界を超え、人類の景観認識と文化行動との関係には夜の景観および地上より上のスカイロアの要素(風、鳥、天体、等)も含まれるという認識のもと、とくに集落や建築の線形構造(alignment)とスカイスケープとの関係を考古学的に探ることを目的とした。

2. 研究の目的

近年、Journal of Skyscape Archaeology という学術雑誌が創刊され、また同名称の論集も刊行されているが(Silva and Campion 2015)、本研究は欧米において考古天文学(archaeoastronomy)と呼称されてきた分野を、人類学や考古学の景観(ランドスケープ)論に統合し、より総合的な環境認知の解明とその社会文化的意義の解明を目指したものである。

2014年に公刊された『考古天文学・民族天文学ハンドブック』全3巻(C. Ruggles 2014)の中で天文現象の考古学および民族学的研究の理論や方法論の最前線が提示され、かつ世界各地の研究の現状が披露された。しかしこの論集では日本人研究者の貢献は天文学者を除くとほとんどなかった。

研究代表者は琉球列島のグスク時代の考古天文学や沖縄および日本の星民俗について国際学会で2011年から2018年まで英文の発表を続けているが、他の日本人参加者は皆無であった。日本の研究者はアジアだけをとりても中国、韓国、インドあるいはタイなどにもこの分野で大きく遅れをとっている。

オセアニアでは、ポリネシアにおいて考古天文学の研究が蓄積され始めている(後藤 2014、2019)。ミクロネシアは松岡静雄、土方久功氏、八幡一郎氏をはじめ大戦前後にかけて日本の考古学者や民族学者の活躍が大きかった。しかしこのようにオセアニアにおいてもっとも星に関する民族誌的情報が豊富なミクロネシアでは考古天文学のめばしい研究がない(cf. Esteban 2003)。

そこで本研究ではミクロネシアや日本において景観論や考古学を調査してきた研究者が天文学者および現地研究者の協力も得て、考古学と民族学を統合したスカイスケープ人類学の先駆的研究を試みたものである。

とくにカロリン諸島で今日まで使われている遠洋航海用のスターチャートは世界的にも著名である。これは航海士が弟子に星を教えるときに、海岸等の砂の上に珊瑚の石や貝殻を丸く並べるものであり、天体の出現・没入に関して、物質文化を参照して理解していたことを示す。またキリバスでは航海の指標とする島から出現ないし没入する星の方位に合わせた航海石があった。近年ハワイでも航海の指標となる星を示したと思われる神殿が発見されており、他オセアニア各地で同じ目的をもった遺構が存在する可能性がわかってきた。このようなオセアニアの豊富なスターロアが地上の建築や集落に如何に物質化しているかを追究することで空景観と陸景観、昼景観と夜景観を統合した景観論、さらには無形文化遺産(知識および神話・伝承)と有形文化遺産(建築)との統合的な理解を目指す点でこの研究は考古学、人類学の理論において新たな可能性を開くことが本研究の目的であった。

<参照文献>

Esteban、César (2003) Some notes on orientations of prehistoric stone monuments in Western Polynesia and Micronesia. *Archaeoastronomy* 17: 31-47; 後藤 明「ハワイ・ポリネシアにおける天文人類学近年の成果について」『神話と風土：比較神話学論集』、pp.61-68.; Ruggles、C.(ed.)(2015) *Handbook of Archaeoastronomy and Ethnoastronomy*. 3 Vols. Springer; Silva、Fabio and Nicholas Campion (eds.)(2015) *Skyscapes: the Role and Importance of the Sky in Archaeology*. Oxbow Books.

3. 研究の方法

(1) 本研究では考古天文学(archaeoastronomy)と称されてきた方法論に依拠したが、同時にミクロネシアの天体に関する豊富な民族知識(民族天文学)に基づいた民族考古学的方法論を接合させる点で斬新であった。

考古天文学的方法では、遺構の構造と周囲の景観の関係から、特定の季節に見えると推定される天体の出現や没入地点の可視性を確認することによって、過去に観察が行われたであろう天体の種類についての仮説を導き出した。

そのためには航海や季節の指標として広く言及され、民族語彙がある星、たとえばブレアデス、アルデバラン(おうし座)アルタイル(鷲座)、ベガ、オリオン、アンタレス(さそり座)、南十字座など注目度の高い星座に注目した。さらに夏至・冬至や春分・秋分点の太陽、さらに潮汐と関係し一月内の日にち名称の基本となる月齢などに注目し、遺跡の線形構造との関連を探った。

(2) 調査の候補となった遺跡構造については過去の文献も参照したが、かつて公表された分布図は北が磁北か真北か不明な場合があり、かつ天体の観測候補地点(例 石塚、等)の記載も不明確なので、真北を基本とした測量をあらためて行った。その場合崩落など遺跡の変形も十分考慮した。

実際の遺跡の測量は近年、著しく発達してきた GPS、とくに現地に持ち運びが容易なポータブル型の GPS 装置と基地局と移動局を組み合わせる航法センサーを用いた。

(3) その測量結果を天文学シミュレーションによって天体との関連性を分析した。特定の天体の観察の蓋然性が高まった場合、次にその観察目的の解釈を試みた。建築遺構や集落の形態から推測される機能および立地というコンテクストの情報と、既存の民族誌および調査中に行う予定の住民への聞き取りから、季節の指標、儀礼のサイクル、航海の指標、その他吉凶の徴、等の解釈を加えた。

(4) 四カ年にわたる調査の結果は、毎回、調査許可をいただいた HPO (Historic Preservation Office) に報告書を提出した (〔報告書〕の項目参照)。

4. 研究成果

(1) 2016 年度はキリバスのアロラエ島にある航海石 (navigation stone) の調査を行った。航海石は約 100 年前に発見され数度にわたって調査されてきたが、その位置や方位に関する情報がまちまちであった。今回われわれは GPS 装置を持参してその位置を計測することによって、地球座標系に位置を落とすことができた。また各航海石の方位とこの岬から見える星の没入地点の方位を、天文シミュレーションを行うことによって、各石がどの島を目標にし、またそのさいどの星が導きの星となるかを推測できた。報告書: 後藤 明、大西秀之、石村智 *A Report on the Reassessment of Navigational Stones on Arorae, Kiribati. A research report to HPO Office of Kiribati and Arorae Community, 2017.*

(2) 2017 年度はミクロネシア連邦ポーンペイ島の世界遺産、ナンマトル遺跡の調査を行った。とくに地表の位置や方位を正確に出せる航法センサーを用いて、ナンマトル遺跡の主要遺構である Nan Douwas, Karian, Pahnkadira、および Idhe の四遺構の方位計測を行った。その結果従来いわれているように Nan Douwas は東西南北四方方位を基本としている、一方、他の遺構は互いに可視の範囲ではないが、基本的な建築方位が一致していることを示した。ただこれが天文現象に基づくか否かはさらなる検討が必要である。さらに島内の調査では、「季節を変える石」という儀礼的な施設が村の入り口などに設置されているのを実見し、季節を変える指標となる自然現象 (例 季節風、星座) について聞き取りを行った。報告書: 後藤 明、大西秀之、石村智、長岡拓也、菅沼文乃 *A Research Report of a Survey in Pohnpei, 2017. A research report to HPO Office of Pohnpei State, FSM, 2018*

(3) 2018 年度はミクロネシア連邦ヤップ島の儀礼の場 malal と聖地 teeliw を中心とする調査を行った。Malal に関しては従来の磁北ベースの調査による平面図を真北補正したものと大きな違いはなかったが、とくに世界遺産化を目指している代表的な Mangyol Malal は通路 [= 儀礼の踊り場] が東西南北軸を基本とした「十字」になっていることが特徴であるが、われわれの計測結果では、過去の調査と違って東西南北軸から数度ずれている (北が 5 度程度西にぶれている) ことがわかった。また十字の通路の交差点の中央部には星形の遺構があるとわれわれの調査で見いだしたが、それは従来の調査で記録されていなかった。

さらに聖地であるため今まで立ち入り調査のできなかった taliw についても、現地住民の理解を得て、5 カ所ほど調査することができた。その結果、ヤップ島には神聖さの異なる taliw の階層がある点、そしてもっとも神聖な七つの taliw はブレアデスの女神の子供が起源とされる点、またある村の taliw では取り囲む立石に 12 ないし 13 ヶ月の月の名称が使われていた点など天文学的な意味が付与されていることを明らかにした。報告書: 後藤 明、吉田二美、石村智、長岡拓也、菅沼文乃 *A Research Report of a Survey in Yap, 2018. A research report to HPO Office of Yap State Office, FSM, 2019*

(4) 2018 年には比較事例として、ポリネシア・クック諸島のラロトンガ島およびアロラエ島でマラエ (神殿) 遺跡の景観と方位の調査を、本科研を用いて、研究代表者が個人で行った。ラロトンガ島ではニュージーランドへの航海に使ったとの伝承のあるコンパス・ロックの方位を計測した。その結果、この石がニュージーランドの方位を向いており、参照した星座はカノーパスではないか、との推測結果を得た。

(5) 2019 年度はミクロネシア連邦コスラエ島の都市型遺跡レラの調査を行った。まず「砦」とされる、もっとも大型の石垣のある遺構 Kinyeir Fulat、の計測を行った。従来入り口と言われてきた部分はむしろ儀礼的な窓であり、そこからロシアの航海者が記録したような冬至の儀礼、あるいは聖山の Finkol 山に沈む太陽ないし星の観察を行ったのではないかと天文シミュレーションの結果推測した。また王墓とされる Insru and Inol の墳墓および石室の方位を計測した。民族誌では「東に頭を向ける」という民族誌の記述と合わせ、その方位定めた基準について考察した。報告書: 後藤 明、大西秀之、石村智、吉田二美、菅沼文乃 *A Research Report of a Survey in Kosrae, 2019. A research report to HPO Office of Kosrae State, FSM, 2020*

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計26件（うち査読付論文 14件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 後藤 明、大西秀之、石村智	4. 巻 35
2. 論文標題 A Report on the Reassessment of Navigation Stones on Arorae, Kiribati	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 People and Culture in Oceania	6. 最初と最後の頁 109-125
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 後藤 明	4. 巻 169
2. 論文標題 ポリネシア人移住論に挑む：オーソドックス・シナリオに挑む	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 季刊・民族学 特集：オセアニア考古学の挑戦 篠遠喜彦の足跡から	6. 最初と最後の頁 20 - 27
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石村智	4. 巻 169
2. 論文標題 世界文化遺産と考古学	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 季刊・民族学 特集：オセアニア考古学の挑戦 篠遠喜彦の足跡から	6. 最初と最後の頁 76-83
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大西秀之	4. 巻 25
2. 論文標題 共有資源としてのアイヌ文化化史跡：北海道標津町における地域住民の語りを事例として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 生態人類学会ニュースレター	6. 最初と最後の頁 32-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 後藤 明	4. 巻 18(2)
2. 論文標題 House and burial orientations of the Hokkaido Ainu, indigenous hunter-gatherers of northern Japan.	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Meditarranean Archaeology and Archaeometry	6. 最初と最後の頁 173-180
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 後藤 明	4. 巻 65(2)
2. 論文標題 ハワイ・ポリネシアの酋長制社会とコスモヴィジョン	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 考古学研究	6. 最初と最後の頁 39-52
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 後藤 明	4. 巻 16
2. 論文標題 キリバス・アロラエ島の航海石調査：再評価	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アカデミア：人文・自然科学編	6. 最初と最後の頁 215-231
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 後藤 明	4. 巻 1
2. 論文標題 バルカン半島初期金属器時代の天文関連装飾について：ブCHEDール文化を中心に	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 篠田知和基編『分身の神話・その他』	6. 最初と最後の頁 59-65
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 後藤 明	4. 巻 7
2. 論文標題 移動民のコスモビジョン	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 南山大学人類学研究所・研究論集	6. 最初と最後の頁 26-44
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大西秀之	4. 巻 1
2. 論文標題 プロセス学派とポストプロセス学派の相克をめぐる人類学的布置」	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『ムカシのミライ：プロセス考古学とポストプロセス考古学の対話』阿子島香・溝口孝司監修	6. 最初と最後の頁 125-149
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大西秀之	4. 巻 46(13)
2. 論文標題 モノとヒトが織りなす技術の人類誌 / 史：考古学の可能性をめぐる民族誌フィールドからの応答	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 現代思想	6. 最初と最後の頁 170-180
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石村智	4. 巻 74
2. 論文標題 書評 北條芳隆著『古墳の方位と太陽』	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 『貝塚』	6. 最初と最後の頁 27-30
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 吉田二美、寺居剛	4. 巻 2018年1月号
2. 論文標題 Suprime-Camが見せてくれた太陽系の進化	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 天文月報	6. 最初と最後の頁 28-40
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅沼文乃	4. 巻 1
2. 論文標題 お年寄りと出会う、老いと出会う	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ラウンド・アバウト フィールドワークという交差点』神本秀爾、岡本圭史 (編著)	6. 最初と最後の頁 153-162
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅沼文乃	4. 巻 7
2. 論文標題 宮古島から那覇市への戦後移住に関する研究 辻・若狭に居住する移住経験者を事例とする調査報告	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 『人類学研究所研究論集 第7号 定着 / 非定着の人類学 「ホーム」とは何か』	6. 最初と最後の頁 126-140
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅沼文乃	4. 巻 9
2. 論文標題 自分史のなかに書かれる古い 沖縄県の高齢者向け自分史講座を事例とする人類学的研究	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 年報人類学研究	6. 最初と最後の頁 20 - 25
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 後藤 明	4. 巻 1
2. 論文標題 宇宙文化の人類学的研究に向けて	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 篠田知和基編『文化英雄その他』、比較研究組織	6. 最初と最後の頁 61-73
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長岡拓也・片岡修・石村智	4. 巻 68(4)
2. 論文標題 ミクロネシアの巨石遺跡ナンマトルの研究の現状と世界遺産への登録について	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 古代文化	6. 最初と最後の頁 120-126
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長岡拓也	4. 巻 1
2. 論文標題 考古学と口頭伝承から見たナンマトル遺跡 / Nan Madol from the Perspective of Archaeology and Oral Tradition	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 片岡修・長岡拓也・石村智『ミクロネシア連邦ポーンペイ州のナンマトル遺跡およびチェムエン島所在遺跡の現状調査報告書』ミクロネシア連邦・ポーンペイ州歴史保護局提出報告書	6. 最初と最後の頁 94-101
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長岡拓也	4. 巻 47
2. 論文標題 新世界遺産・ナンマトル遺跡：2. 島の歴史の中でのナンマトル」	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 NPO法人ミクロネシア振興協会会報：カセレーリエ	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大西秀之	4. 巻 8
2. 論文標題 ナーナイ系先住民の集落景観を形作った土地利用と生計戦略：景観に刻まれたソビエト体制の展開と崩壊	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 年報人類学研究	6. 最初と最後の頁 1-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 長岡拓也	4. 巻 48
2. 論文標題 新世界遺産・ナンマトル遺跡：3. 世界遺産登録と今後の課題	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 NPO法人ミクロネシア振興協会会報：カセレーリエ	6. 最初と最後の頁 1-2
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 後藤 明	4. 巻 (1)
2. 論文標題 Solar Kingdom of Ryukyu: the formation of a cosmovision in the southern Islands of the Japanese Archipelag	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Journal of Astronomy in Culture	6. 最初と最後の頁 78-88
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 後藤 明	4. 巻 72
2. 論文標題 宇宙考古学の射程：現代考古学・物質文化研究としての展望	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 貝塚	6. 最初と最後の頁 11-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 大西秀之	4. 巻 4
2. 論文標題 世界遺産を生み出す地域の営み：「生きている遺産」としてのフィリピン・コルディリエラの棚田景観	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 東北学	6. 最初と最後の頁 116-133
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石村 智	4. 巻 2011-2015
2. 論文標題 Memories of a sacred landscape: Lost female rituals and the surviving cultural landscape in the Amami	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 Lectures from the International Research Exchange between Nara National Research Institute for Cultural Properties and Columbia University.	6. 最初と最後の頁 31-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計11件（うち招待講演 4件 / うち国際学会 4件）

1. 発表者名 大西秀之
2. 発表標題 Tribalism or Chiefdom?: The formation of Ainu society by influences from outside worlds
3. 学会等名 Out of Eurasia、 International Academic Meetings in Mexico: Monuments、 Art、 and HumanBody（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 後藤 明
2. 発表標題 Archaeoastronomy of Japan: a short history.
3. 学会等名 Society of European Astronomy in Culture, Graz, Aust（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 後藤 明
2. 発表標題 南方世界の造船・航海術と信仰
3. 学会等名 「神宿る島」宗像・沖ノ島と関連遺産群 特別研究事業 第1回国際検討会古代東アジアの航海と宗像・沖ノ島、(招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 石村智
2. 発表標題 Safeguarding Cultural Heritage in the Pacific: Current Issues and Perspectives
3. 学会等名 World Social Science Forum 2018, Fukuoka. (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大西秀之
2. 発表標題 景観認識としてのアイヌ文化遺産：北海道標津町における地域住民の語りを事例として
3. 学会等名 生態人類学会第24回研究大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 大西秀之
2. 発表標題 Ainu historical heritage as common property of the local community.
3. 学会等名 CHAGS (Conference on Hunting and Gathering Societies)XII, Universiti Sains Malaysia, Pulau Pinang, (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大西秀之
2. 発表標題 Hybridization of two differert cultural groups in the Ainu history.
3. 学会等名 The International Workshop, Cultural History of PaleoAsia, Research Institute for Humanity and Nature, Kyoto (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 大西秀之
2. 発表標題 アイヌ文化に対する地域住民の多様な語り：北海道標津町7地区における聞き取り調査を事例として
3. 学会等名 日本文化人類学会第52回研究大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 吉田二美
2. 発表標題 Multi-band photometry of young family asteroids at Maidanak Observatory.
3. 学会等名 IAU Focus Meeting FM1: A Century of Asteroid Families. Vienna, (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 後藤 明
2. 発表標題 Skylore of indigenou hunter-gatherers of northern Japan: house and burial orientations of Hokkaido Ainu.
3. 学会等名 Oxford XI (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 大西秀之
2. 発表標題 地域共有資源としてのアイヌ文化史跡の可能性：ポー川史跡自然公園を中核とする文化的景観を事例として
3. 学会等名 日本文化人類学会第51回研究大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計9件

1. 著者名 後藤 明、池谷和信他	4. 発行年 2020年
2. 出版社 昭和堂	5. 総ページ数 295
3. 書名 『ピースでたどるホモ・サピエンス史：美の起源に迫る』池谷和信編	

1. 著者名 後藤 明、石村智、他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 349
3. 書名 『太平洋諸島の歴史を知るための60章：日本とのかかわり』石森大知・丹羽典生編(

1. 著者名 後藤 明、石村智他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 雄山閣	5. 総ページ数 258
3. 書名 『ヒトはなぜ海を越えたのか：オセアニア考古学の挑戦』秋道智彌・印東道子編	

1. 著者名 後藤 明 (編)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 南山大学人類学研究所	5. 総ページ数 103
3. 書名 それぞれの大地、それぞれの宇宙	

1. 著者名 長岡拓也 (編) Peterson Sam (Author),	4. 発行年 2018年
2. 出版社 CreateSpace Independent Publishing Platform	5. 総ページ数 102
3. 書名 Pohnpei: Pwuken Kadaudok (PALI KEIEU) (Volume 1)	

1. 著者名 後藤 明	4. 発行年 2017年
2. 出版社 同成社	5. 総ページ数 267
3. 書名 天文の考古学	

1. 著者名 後藤 明	4. 発行年 2017年
2. 出版社 講談社	5. 総ページ数 282
3. 書名 世界神話学入門	

1. 著者名 石村智	4. 発行年 2017年
2. 出版社 吉川弘文館	5. 総ページ数 247
3. 書名 よみがえる古代の港	

1. 著者名 後藤 明	4. 発行年 2016年
2. 出版社 勉誠出版	5. 総ページ数 1038 (331-339)
3. 書名 世界神話伝説大事典（オセアニア部門の各項目の執筆）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	吉田 二美 (Yooshida Fumi)	千葉工業大学・惑星探査研究センター・研究員	
研究協力者	長岡 拓也 (Nagoka Takuya)	パシフィカルネサンス・主監	
研究協力者	菅沼 文乃 (Suganuma Ayano)	南山大学・人類学研究所・非常勤研究員	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
連携研究者	石村 智 (Ishimura Tomo) (60435906)	独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所・無形文化財部・室長 (82620)	
連携研究者	大西 秀之 (Ohnishi Hideyuki) (60414033)	同志社女子大学・現代社会学部・教授 (34311)	